
little honey

蒼真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

little honey

【ZINEコード】

Z3910Z

【作者名】

蒼真

【あらすじ】

「ぐぐく」普通の高校生である俺、高村佑樹。

勉強もスポーツも容姿も平均程度。特技らしい特技もない。それゆえ、これまでモテた経験はない。

しかし、そんな俺がある日突然、情熱的な愛の告白を受けたのだ。本来なら嬉しくてたまらないはずなのに。

俺は素直に喜ぶわけにはいかなかつた。

なぜなら、その告白をしてきた少女は・・・。

高校生の少年を主人公としたラブコメディです。
他サイト「アツトノベルス」にも掲載しています。

第1話～突然の告白（前書き）

勉強もスポーツも容姿も平均並みの高校生の少年が、ある一人の少女に

好かれてしまうラブコメティ。

シリアスな部分もありますが、基本は明るい話を目指しています。

第1話～突然の告白

「あなたがすきなの・・・」

つるんだ瞳。情熱的な愛の告白。

その熱を含んだ視線は俺をしっかりとからめこむように、身動きができなかつた。

それを知つてか知らずが、その少女は俺に体をぴつたりと寄せている。

俺はこれまで女の子にモテた経験はない。

恥ずかしながら、重ねたきた年齢の数だけ彼女がいなかつた。彼女いない歴17年。

それほど変な男だとは思つてはいないが、いわゆる『モテる男』ではない。

それはハッキリと自覚している。

この世には生まれつきモテる奴とモテない奴がいることぐらいよくわかつている。

そんな『モテない男』である高村佑樹が情熱的な愛の告白をやれているのだ。

それまで何度も頭の中で描いていた（妄想していた）理想的なシチュエーション。

夢にまで見たその状態は、狂喜乱舞といつていいぐらいの嬉しさだろう。

本来ならば。

自分とさほど変わらない年齢の少女、または年上のキレイなお姉様であったのなら
その場で踊つてみせてもらいうべういの嬉しだったと思つ。

やう、俺はこの状態を素直に喜ぶわけにはいかなかつたのだ。

なぜなら・・・

愛の告白をしてきた少女は・・・

・・・まだ幼稚園児の女の子なのだから・・・。

第2話～その少女の名は美月

「あ、あのね、ひょっと落ち着いて～、美月ひちゃん・・・」

体をぴったりと寄せ、潤んだ瞳のまま俺を見上げている6歳の少女。
その目は恋した女だけと何ら変わらない（のよつな気がする）から驚きだ。

「どうして・・・？」

みずきが佑にいちゃんなこと、『すき』つていっても信じてくれないの・・・？

いや、信じる信じない以前に、この状態はまずいだらつ！
6歳の幼女が高校生の男の体の上に乗つかるよつとして、愛の告白をしているのだから。

早く俺の上からじててくれ！とストレートな言葉が口から出かかつたが
俺は必死にそれを飲み込んだ。

そのまま言え、美月ちゃんを深く傷つけてしまつだらうか。

「いや、その・・・美月ひちゃんのことを信じないわけじゃないんだよ。」

ただ・・・その・・・俺も男だから・・・。

男として、こんな状況を軽々しく受け入れるわけにはいかない
つていうか・・・

え～っと・・・と、とにかく、一旦離れよう？

幼女に對して言い訳めいた釈明をしつつ、俺は倒れかかった体を起こし

美円ちゃんの肩を掴んで、そつと俺の体から引き離した。

あまりに不自然なその状態から少しだけ抜け出せば、やつと落ち着いて呼吸ができる気がする。

しかし、状況が変わったわけではない。

あの真剣な眼差しから考えて、美円ちゃんが嘘をついているとは考えにくい。

いや、いつそ嘘であつてくれたほうがどれだけいいか。

おそれおそれ美円ちゃんの様子を伺えば、つづむにて肩を震わせている。

泣かせてしまつたのか・・・?

しかし真つ当な男なら、幼女からの告白を受け入れるなんて出来ないはずだ。

(一部の男は大喜びなのかもしれないが)

「つづむいた美円ちゃんからやがてすすり泣く声が聞こえ出した。

やつぱり泣いている・・・。

「あ、あのね、美円ちゃん・・・」

告白を受け入れる」とはんできなくとも、幼女を泣かせてしまうのはなんとも氣分が悪い。

なんとかなだめたいが、いつものように頭を撫でてやつてもいいも

のかどうか。

それさえ悩む。

俺は一体、どうしたらいいんだ……。

頭を抱え込むようにして悩んでいると、美月ちゃんが先に言葉を発した。

「佑にいちやん、みづきの思いをわかつてくれないだ……
みづき、まだ小さいけど本気だよ？」

前にテレビで見たもの。

すぐ近くの離れた男の人と女の人とが結婚していたりするよ？」

いや、それは両方が大人だから許されるのであって。

たしかに芸能界だとかでは、かなり年上の男（熟年）と若い女性が結婚していたりする。

それは嘘ではない。本当のことだ。

しかし、相手が幼女で、しかもその幼女の想い人が高校生だなんて……。

そんな恋愛、あるわけがない。

妄想の世界ではあるのかもしれないが、現実であつてはいけないとだ（と思つ）。

「あのさ……美月ちゃんが俺のことを『好き』って言つてくれるのは嬉しいよ？」

「でもね、それを簡単に受け入れるわけにはいかないんだよ。

俺にとって美月ちゃんは……家族のような大切な存在だからいい加減に扱いたくないんだよ。

そのとこ、わかつてくれる？」

「みづきの」と、大切なの？」

すすり泣いていた美月ちゃんの涙が止まつた。

よしつー泣き止んだぞ・・・

「そうだよ、美月ちゃんは『大切な子』だ」

再び泣かせたくなくて、慌てて言葉を続けた。

「うんっ！ みづきにとっても佑にいちゃんは『大切な人』。佑にいちゃんにとってもみづきは『大切な子』。だつたら、二人は『両思い』だねっ！」

・・・どうしてそういう解釈になるんだあー！！

「うれしいなっ 佑にいちゃんとみづきは両思い～」

美月ちゃんはまるで歌うかのよつに、『機嫌でつぶやいている。

「じゃあ、またね～。佑にいちゃん。
明日もまた、みづきと遊んでね！」

軽やかなスキップで俺の部屋を出ていく美月ちゃん。
あまりな展開に呆然としている俺を一人残して。

第3話～少女との出会い～

現在幼稚園児の美月ちゃんが隣に引っ越してきたのは、およそ4年ほど前のことだった。

当時、俺は中学生。

外資系の証券会社に勤める父親と品の良さそうな母親、そして一人娘。

父親は仕事が忙しいらしく、家を空けがちで、あまり顔を見たことがない。

たまに顔を合わせることあっても、俺の挨拶を軽くスルーしてくれるるので

正直あまりいい印象はない。

母親のほうは、近くに誰も知る者がいない地域に越してきたようで隣である俺の母を何かと頼るようになり、いつしか年代は違うのにすっかり打ち解けていた。

二人でよく長話をしているので、一人になつた美月ちゃんは自然と俺が面倒を見るようになつた。

『俺なりの事情』もあり、小さい女の子には努めて優しく接してやろうと思いつ

よく一緒に遊んであげた。

一緒に公園に行つたり、お人形さんごっこに付き合つたり、子供向けDVDと一緒に見てやつたり。

それなりに楽しいこともあるが、所詮は幼女のお守り。

時折面倒になることもあったが、小さな美月ちゃんは俺を『佑兄ちゃん』と呼んで

よくなつき、俺の顔を見ると嬉しそうに飛びついてくるので悪い気

はしなかつた。

遊び疲れると床の上で寝てしまつたことがある（幼児つてのは突然寝てしまつたりしご）

そのままにしておくわけにはいかないので、俺のベットに運んで寝させてしまつたりもした。

そんなわけで、実の妹でもないのに、すっかり美月ちゃんの『良いお兄ちゃん』となつた俺だつた。

そんなんある田のじと。俺は自室で学校の宿題のレポートをまとめていた。

美月ちゃんは遊び疲れてお昼寝中だ。

ところが、俺のベットですやすや寝ていた美月ちゃんがぐずぐずと泣き出した。

悪い夢でも見ていらしい。

以前にも何度もこうこうじとがあり、初めてのときはびつしていいのかわからなくて

慌てて母のところに飛んでこつて報告し、どうすればいいのか相談した。

母曰く、幼児といつのは眠りから覚める前後で見る夢に驚いてつなされたり

いきなり田覚めたことと、ちょっとしたパニックになつたりするらしい。

だから、そんなときはやさと抱きしめるよつて体を支え、背中をもすつてやつたりして

スキンシップをとりながら、大丈夫だよ、と声をかけてやれば自然と落ち着く、とのこと。

母に言われた通りの方法で対応すると、美月ちゃんは落ち着くことがわかつたので

俺はその日も同じように対応した。

そつと抱きしめて、背中をさすり

「大丈夫だよ。怖いものなんて何もないから。俺がついてるよ」「
と声をかけた。

これで落ち着いたのだ。それまでは。

しかし、その日は美月ちゃんはそれだけでは落ち着かず、俺に勢いよく抱きついてきたのだ。

予想していなかつた美月ちゃんの行動に俺は体のバランスを失い、ベットに倒れたような格好となつた。

そこに冒頭の『愛の告白』があつたのだ。

正直、青天の霹靂と言つてもいいぐらいの出来事だつたが落ち着いて考えてみれば、あれは美月ちゃんが寝惚けていたのかもしれない。

うん、きっとそうだ。

昼寝から覚めた直後だつたのだから、悪い夢でも見てうなされ、寝惚けてしまつたのだ。

そうだ、そうに違ひない・・・

明日からどうして美用ちゃんに接していいのか悩んでいたが
『寝惚けていた』という結論に達してから、俺の気持ちはすっかり
落ち着いていた。

明日になれば美用ちゃんはきっと今日のことは覚えてこないだろ？
だって寝惚けていたのだから。

そう思いながら、残った宿題を片付けて、晴れやかな気持ちでベ
ッドに入り、眠った。

明日になれば全て解決している、とそう信じて。

しかし、その解釈はとても甘いものであつたことを
翌日になつて俺は思い知られるのである。

第4話～おわかの展開

「……………？」

翌日、俺が学校から帰宅し、小腹が減ったので何かないかと冷蔵庫を

あさくつてこたときのこと。

母さんが事も無げに言つたのである。

「お帰り、佑樹。

もうやがて、アンタとお隣の美冴ちゃん、『婚約』するところにな

つたから」

「あ、もう『婚約』ね……。

・・・つて、ちよつと待て！

『婚約』つて何だよつ！？

俺は驚嘆して、冷蔵庫から出したばかりのパーリ出を机の上に落としてしまった。

驚くやうに痛いやうでわけがわからない。

「何もそんなに驚く」とないじゃない。

『婚約』と言つても、ちよつとした形式だけよ。

美冴ちゃんを喜ばせてあげたこの。

美冴ちゃん、アンタの「じ、王子様か何かに思つてゐみたいだ
し。

私から見ると、じみーな高校生なんだけれどねえ。

まあ、あのぐりーこの女の子って年上の男の子に妙に憧れたりす

るしね。

そんなわけで、いいわね」

何がいいとこか。

「美月ちゃんママの琴子さんも大賛成でね。
以前から『アンタのこと褒めて、大層気に入ってくれてたみたい
だし。

何より『美月が喜ぶわ!』って嬉しそうだつたしね」

「ちよ、ちよっと待て……」

「何よ、何か文句でもあるの?」

「大有りだよつ!」

なんだよ、『婚約することになつたから』って。
まるでどこかに旅行に行くみたいな気軽な言い方は。
大体、俺の意志はどうなるんだよつ!」

「なうに、ムキになつてるの?」

だから『ちよとした形式だけ』って言つてるでしょ。
二人で並んで座つて、簡単な書類みたいなものにサインして、
写真撮るだけよ」

「『形式だけ』つつてもマズイだらつ!」

高校生と幼稚園児なんだぞ!

世間はどう捉えると思うんだよ?

そもそも俺は美月ちゃんのこと、そんなふうに想つたことな
くはないぞ!」

「でも、アンタ、美月ちゃんに告白されて
『大切な子だよ』って応えたんでしょ？」

途端、昨夜の美月ちゃんに押し倒されたよつた形で告白されたことを思い出した。

幼女とは思えない真剣な眼差しの美月ちゃんを。顔が熱くなつてくるのを感じた。

「み、見てたのかよつー？」

声が裏返つていたが、母はそんなこと気にもしていなによつだ。

「や～ね、覗くわけないでしょ。

美月ちゃんから聞いたのよ。

『みづきと佑にいちゃんは両思いなんだよつー』って。

美月ちゃん、とつてもいい顔してたわ。

あの笑顔を何とか続かせてあげたいね、つて琴子さんとも相談して

じやあ、『ウチの息子と婚約でもさせてあげたらどうかしら？』って

話になつたのよ。

美月ちゃんね、今、幼稚園に行きたくないらしくて毎日元気がないの。

だから少しでも喜ぶことをさせてあげたいわけ。

アンタも少し協力しなさい、いいわね！」

「いいわけないだるー！」

俺は慌てて母の言葉を制した。

『冗談じやない、高校男児が幼稚園児と婚約なんてことになつたら…

学校の奴らに知られたら死ぬほど笑われるし、女の子たちには口コン扱いされてしまつ。
ただでさえ、モテないの。

「さう・・・お母さんの頼みを聞いてくれないのね・・・」

そう言つながら、俺をじつと見つめる母の目から涙がポロリと零れ落ちた。

びつせ、嘘泣きだ。それはわかつてゐる。
だけど・・・

俺は母さんの泣き顔にはとことん弱い。

以前は泣いてばかりいた母がやつと泣かなくなつたのだ。

少しでも泣き始めると昔に逆戻りしてしまいそうで、俺は慌ててしまつ。

母をそれを知つていて、『じじやとこうときて使う』『作戦』なのである。

それはわかつてゐるのだか・・・。

母さんの目からどんどん涙が溢れてくる。

その顔を見ていると、どうにも落ち着かない。

「わ、わかつたよつ！

『おままで』と『の続きか何かだと思つておけばいいんだが』
その代わり、周囲の人間には絶対にバラすなよ

途端、母は涙を拭きながらニヤリと笑つた。

「やすがは私の息子。優しい子ね。母さん嬉しいわ。

「じゃあ、近ごろ『ひびきの街』で『婚約式』をあげるからやつもつでね

母の作戦にまんまとしてやられてしまつた。

何でこうなるんだ……。

「ひつして俺は何の因果か、

『幼稚園児と婚約する高校生』になつてしまつたのである。

この先、俺は一体どうなるんだ……。

第5話～向ひのなむ～

その週の土曜日。
俺は学校が休みだといつに、学校の制服を着ている、いや、着せられている。
そして家で唯一の和室で待つている。

誰かつて？

お隣の幼稚園児・美月ちゃんだ。
美月ちゃんとの婚約式のために、俺は母をなんにひで待つよつ言わ
れたのだ。

まつたく、なんでこんなことになつたのか・・・

釈然としない気持ちを抱えたまま、畳の上で寝そべつていると
母さんが和室に戻ってきた。

後ろには、美月ちゃんと母親の琴子さんがいる。

「佑樹、待たせたね。

・・・アンタ、なんて格好しているの。

もつとシャンとしてつ！

言われてしぶしぶ体を起こし、その場に正座した。

ふと目をやれば、美月ちゃんはフリルが沢山ついた白いワンピース
を着ている。

まるでウエディングドレスのようだ。

照れくさうに俯き加減で佇む美月ちゃんは、小さいけれど可憐な
花嫁さんのよつとも見える。

「佑樹、上座のほうに座りなさい。」

さあ、美月ちゃん

佑樹の隣に座つて「

促されて、俺はのつそりと上座へ進み、改めて正座した。
続いて美月ちゃんが俺の横に座る。

隣を見れば、美月ちゃんは恥ずかしげに顔を赤らめているが、とても嬉しそうだ。

この場を心底喜んでいるのが伝わってくる。

「まあまあ、まるで雛飾りのお内裏様とお雛様みたいじゃないの！
ねえ、琴子さん。お似合いの二人よね！」

母さんが脳天気な声をあげた。

お内裏様とお雛様にしては一方が小さすぎるような気がするが。

「美月・・・

本当に嬉しそうね・・・。

あの子のあんな嬉しそうな顔を見るのは久しぶりだわ・・・」

見れば、琴子さんは涙ぐんでいるようだ。

嬉しそうな顔を見るのが久しぶり・・・？

いや、俺と一緒にいるときは、いつもとても嬉しそうだけど・・・

？

少し不思議に思つたので、琴子さんに聞いてみたくなつた。
しかし、彼女もまた嬉しそうに、俺と美月ちゃんが並んだ姿をデジ
カメで撮つているので

その場で質問できそうになかった。

「佑に……ちゃん……」

隣から美月ちゃんの声。

その声に応じて顔をそちらに向けると、俺はドキリとした。

美月ちゃんの俺を見る田・・・それは少女とこより『女』の田
であった。

艶めいた瞳。

幸せをゆっくりとかみしめているかのよつた、穏やかな微笑み。
姿はどう見ても幼女なのに、感じる雰囲気が『女』なのだ。
白い清楚なワンピースを着ているせいか、雰囲気も普段より大人つ
ぽい。

今日の美月ちゃん、なんだかいつもと違つ・・・

そう感じた途端、俺の胸が急にドクンドクンと音を立て始めた。

ん・・・?

なんだこれ・・・?

まさか、俺

幼女相手にときめいているのか・・・?

自然と顔が赤らんでくるのを感じ、俺は慌てた。

だつて、相手は幼女だぞ?

俺は口リコンじゃない。

美月ちゃんは・・・俺の『妹』だ。

血縁関係は全く無いけれど、俺にとつては可愛い妹なのだ。

『妹』といふことを意識すると、俺の心臓の音はピタリと止まり、平常に戻った。

そう、これでいいんだ・・・。

俺は美月ちゃんを『妹』として大切にしてあげなくてはいけないのだから。

『妹』は・・・大切にすべき存在なのだ。

一人自分の心と葛藤していた俺だったが、平常心に戻ると改めて美月ちゃんを見、小さく声をかけた。

「美月ちゃん、俺の母親が勝手なことをしてごめんね。ずっと正座して疲れない？ 足、崩してもいいんだよ？」

「ありがとう、佑にいちやん。
でも、だいじょうぶ。
わたし、とっても嬉しいからがんばるのー！」

そう健気に答える美冴ちゃんの顔は本当に嬉しそうだ。

嫌々この場にいる俺はその顔を見ると、なんだか少し罪悪感を感じてつむいた。

美冴ちゃんは心底喜んでいるんだな・・・。

俺、ホントに「んな」としていいのか・・・？

「わあわあ、『眞だけじゃなくて、折角だから『誓い』を立てましょひよー。」

悶々とした俺の思いを吹き飛ばすよつな、母さんの声。

誓い・・・？

すると、母は立ち上がり床の間の小さな引き出しがから上質そうな用紙とペンと朱肉を出した。

「ここに一人の名前をそれぞれ書いてみるだけだいね。」

用紙を見ると、そこに何といつ記してあった。

『今から十年後、私たちは結婚する』ことを誓っています』

おいおいいつ！

婚約だけじゃなかつたのかよつ！
け、結婚つて・・・。

「へいへいでもやつあわだねーーー。

俺は慌てて母ちゃんの体を小突いて、耳元に小さな声で抗議した。

あたし、母も俺の耳元でわわわ。

「婚約式なんだから、将来を誓わなきゃ おかしいでしょ？

美冴ちゃんを安心させてあげるためよ。

ちよつとしたお遊びだと想つて、付を合つてあげなさいーーー。」

美冴ちゃんのためかよ・・・

俺の気持ちはじつでもいいのか？

母親を恋しがる年齢でもないが、息子のじとせどりでもことと思つているかのよつた発言にはムカつぐ。

いつそこの場を出て行つてやがつたかと思つたが、不安そうに俺を見つめる

美冴ちゃんの姿を見てしまつては、やつもいかなかつた。

母に促され、俺はしぶしぶペンを取り、名前を書いた。

『高村 佑樹』

そして朱肉に親指を押し付け、その横に押す。拇指だ。

続いて、美冴ちゃんも母親の琴子ちゃんと一緒に用紙に名前を書く。

『あたじつ みづせ』

まだ漢字を書けないから平仮名だ。
続けて押す。

「わあ、これで一人の署名・捺印も終わったことだし
婚約は成立したと考えていいわね。
美月ちゃん、おめでとう！」

母さんの台詞の中には俺の名前は入っていない。
全く、俺のことなど思っていないんだか……。

「わあ、最後にもう一度写真を撮っておきまじょう
と母ちゃん。

「うふふ、本当にお似合いの一人ね」

と無邪気に喜ぶ琴子ちゃん。

うかれまくっているかのようこの一人。

俺はこの一人の大人に完全に振り回されているらしい。
それがわかっているのに、抗議できない自分が恨めしい。

これで俺は本当に幼稚園児と婚約してしまったことになる。
(公にしているわけではないので、あくまで内輪だけだが)

ああ・
これから俺はどうしていいんだ?
美月ちゃんにもどう接していいんだ?

一人悩む俺の側に美月ちゃんが寄り添つてきた。

驚いて見てみれば、俺にしだれかかるように寄り添つている。

それは大人の女性のようだ・・・

本当に・・・

幼稚園児とは思えない。

「うれしいな・・・

これで佑にいちゃんはみづきの『こんやくしゃ』なんだね。
みづき、これからがんばつていいお嫁さんになるねっ！」

いや、頑張らなくていいよ・・・

そう言いたかったが、美月ちゃんの幸せそうな笑顔を見ると何も言えない俺だった。

幼女に甘い俺にも原因があるのかもしれないなあ・・・

そう思い、俺はそつとため息をもらした。

第7話～修行？

婚約式の翌日。

その日の夕食のメインは木炭であった。

・・・ではなく。

どうみても木炭か、黒い埴輪にしか見えないハンバーグがメインだった。

『花嫁修業』と称して、美月ちゃんがこの日の夕食作りに参加しており

俺の分のハンバーグは美月ちゃん作った。

黒い埴輪にも見えるのは、『クマちゃんハンバーグ』にしたかったから、らしい。

たしかにハンバーグは俺の大好物だ。

しかし、いかに好物とはいえ、これはあまりにも・・・。

俺が真っ黒なハンバーグをみつめて言葉を失つていると、美月ちゃんが不安そうに声をかけてきた。

「佑にいちゃん・・・みづきの作ったハンバーグ、食べててくれないの・・・？」

そんな泣きそうな目で見られては何も言えない。

俺は覚悟して真っ黒ハンバーグを切り分け、口に放り込んだ。

ジャリジャリ、ゴリッ・・・・

おそよハンバーグを食べている音とは思えない奇つ怪な音を感じながら無理やりその物体を飲み込んだ。

「うふ・・・おこし・・・よ・・・」

美味いわけはないのだが、そう言つしかないじゃないか？

「よかつた！ たくさん作ったから、こつぱい食べてねつ！」

美用ちゃんは嬉しそうに笑う。

そつか・・まだ沢山あるのか・・・。

俺のほうが泣きたいよ・・・。

ふと台所の隅を見れば、母さんが必死で笑いをこらえているのが見えた。

くつそ、人じことだと思いやがつて。誰のせいだと思つてるんだよ？

その後も美用ちゃんの手料理は続いた。

石にしか見えないガツチガツチの唐揚げやひ、破裂してもはや何の料理かわからない餃子やら・・・。

大量の水を片手にそれらを必死に呑み込む田が続いた。

俺の胃袋は一体いつまでもつだろうか・・・。

「ねえ、佑にいちゃん・・・。『お姫様だっこ』してほしいな・・・。

「

その日も美冴ちゃんの手料理を食べせしめられ、ぐつたりとソファーにもたれて休んでいると
美冴ちゃんがそっと近づいてきて俺にしゃべった。

・・・お姫様抱っこ?

俺は何のことだかわからず考えこんでいたら、母さんが慌てて俺の側に来て言った。

「体を仰向けの状態のまま横抱きする」とよ。
アンタが寝ちゃった美冴ちゃんを運ぶときによつて使つてる抱き方、覚えてるでしょ?」

言われて、寝てしまつた美冴ちゃんを運ぶ光景が頭に浮かんだ。

あ、あれか?!!

「そうか、アレを『お姫様抱っこ』といつのか・・・。

「まったく、アンタは鈍いんだから。そんなことも知らないの?」

母に小馬鹿にされたが、知らないものは知らない。

しかし、なんで今さら美冴ちゃんはその『お姫様抱っこ』をしてほしがるのだろうか?

よくわからないが、期待された日で見つめられていては応えないわけにはいかなかつた。

第8話～彼女のお願い

美月ちゃんの御期待に応えるべく、彼女の背中と膝裏に手を伸ばしそつと抱き上げた。

美月ちゃんは心底嬉しそうな笑顔で、俺の腕に体を預けていた。
「どうか、世間では『コレを『お姫様抱つ』』というのか・・・知らんかった。

こんなもんがそんなにも嬉しいものなのか？

「ねえ、このまま佑にいちゃんのお部屋につれてって！」

「・・・へイへイ」

「へイへイなんていわないでー『王子様』みたいに話してつー！」

さつきまで笑つていていたのに、今度はふりふりと怒り出す。わけがわからない。

『『王子様』って言われても、俺は王子様じゃなくて平凡な高校生ですか
どう話したらいいのかわかりませんよ・・・。

仕方なく、昔見た童話の世界の王子を必死に思い出す。

「では、美月様。わたしのお部屋に参りましょーか？」

「ハイ、王子様。よろこんで！」

なんとも珍妙なお姫様ごっこをしながら彼女を俺の部屋に連れていく。

美円ちゃんは俺の部屋にしまつてある昔のアルバムや本やマンガ、DVD

を見るのが好きなので、彼女が俺の家にいる日の夕食後は俺の部屋に行くのが恒例になっていた。

（無論、Hな本やマンガは秘密の場所に隠してある）

俺は自分の宿題などを片付け、時間があれば彼女と遊んでやる。たいしたことはしないのだが、美円ちゃんはこの時間が一番嬉しいらしい。

母親の勝子さんが迎えに来たときにはすでに寝てしまつてこのときもあるので

その時は俺が美円ちゃんを抱き上げて、じゃなかつた、『お姫様抱っこ』して

お隣まで連れて行く。

その日も俺は宿題をやりと片付け、手が空いたのと美円ちゃんと遊んでやつたと振り返った。

すると、そこには美円ちゃんが立つていて、俺をじっと見つめていたのだ。

どことなく寂しげな、訴えるような目線だった。

「え、どうしたの？ 美円ちゃん。ずっとここにいたの？」

俺の手が空くのずっと待っていたの？

「クンとうなづく美月ちゃん。

見慣れないその表情に、惑つた俺はなんだか落ち着かない。

「い、一緒にアニメDVDでも見よつか? 新作が手に入つたんだよ?」

「ねえ・・・佑にいちゃん・・・」

「ん? どうした?」

「あのね・・・わ、わたしに・・・して・・・」

「へ? 何をしてだつて?」

肝心な部分がハツキリと聞き取れず、思わず聞き返した。とつせに彼女の方に耳を傾ける仕草をとる。

美月ちゃんは頬を赤らめながら、そつと俺の耳にさせやいた。

「あのね・・・みづきに・・・キス・・・して・・・」

はあ、キスね。『キス』なんてタイトルのDVDあつたかな。いや、違う、美月ちゃんは『して』って言つたんだ。

『キスして』って。

キス・・・? え、キスう・・・?

・・・な、なんだつてええー! ! !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3910z/>

little honey

2011年12月29日19時46分発行